

News Letter

自治医科大学地域医療オープンラボ

Vol.50, Oct, 2011

日本語がおかしい！「臨床研究と論文作成のコツ」出版とその後のCRST

CRST代表、産科婦人科学講座 教授
松原 茂樹

2011年7月、東京医学社から「臨床研究と論文作成のコツ」を出版した。きっかけはこうだ。

産婦人科では症例報告書の類は教授がすべて目を通す。当科のシニアレジデントが以下の文章を書いてきた。

「腹痛にて来院。精査を施行し、子宮外妊娠の診断となる。大至急、輸血を日赤センターから集めて開腹手術となった。」



おかしいな部分が6箇所ある。下線部がおかしい。校正のポイントは、

- 1) 「にて」撤廃、
 - 2) 「体言止め多用」禁止、
 - 3) 「動詞をわざわざ名詞化して、それに“施行した”とくっつける」をしない。「精査を施行し」ではなく「精査し」でよい（動詞正々堂々の原則）。
 - 4) 「となる」「になる」禁止。「焼肉定食になります」でなく「焼肉定食です」。
 - 5) 修飾語は被修飾語の直前に配置。書くならば、「大至急集める」。
 - 6) 「隠れた主語」統一。「患者が」なのか「医者が」なのかを意識して書く。
- 1) -6) を取り入れて添削し、意識するとこうなる：

「患者は腹痛を主訴に来院した。子宮外妊娠の診断で輸血準備後に開腹手術した。」。これで充分である。

医学日本語を書くには、この6つプラス8つの合計14のコツがある。これを意識するのとしらないのでは、文章力に雲泥の差がでてくる。「医学英語の書き方」の本は沢山あるが、「医学日本語」解説本は存在しない。正しい日本語が書ければ、今は英語翻訳サービスだってあり、英語の不出来は論文作成への決定的障壁とはならない。英語の前にまず日本語だ。「あの本に書いてある決まりを守った日本語で書いてきてね」とレジデントに言える。これが本書発刊の第1の動機である。

もっとも、「医学日本語の書き方」だけを書いた本など売れそうにない。医者は他者の論文を短時間で読み、研究を組み、成果を論文としてまとめる。試験管を振る研究ではなく、ケースシリーズでも同じである。忙しい臨床医は、「読む」「研究する」「書く」3つを同時に進めねばならない。ところが3つを1冊でカバーした成書はこれまで存在しない。これが本書執筆の第2の動機。

第3の動機はこうだ。「超著名人」「統計学者」「編集専門家」執筆の本は多数あるが、現役臨床医（普通のドクター）が本音で書いたものは意外に少ない。本書では「読む」は名郷直樹先生が、「研究する」は産婦人科の大口昭英先生(CRST sub-chief)が、「書く」は私が担当した。著者3人は、忙しい臨床医であり、寸暇を惜しんで論文を読み、研究し、書いている。3人とも自治医大卒業でほぼ自力であるレベルに到達した。3人が味わった程の困苦を若者に経験させたくはない。熟達職人が技術を惜しみなく開陳した。俺たちを踏み台にして良い論文を書いてくれ！ 以上が本書を書いた3つの理由だ。

「書く」について

冒頭に例示した「日本語の書き方」は実は本書の“おまけ”であり、論文の書き方について解説してある。「査読者はここを見る」や、「論文の structure: どこに何を書くか?の決まり」は特に有用だと思う。実は、この原稿執筆

中にニュースが来た。今年から産婦人科学会では「best reviewer」賞を選ぶことに決めた。英文誌査読者のうち、最も良い査読をした者を表彰する制度だ。査読者側も点数化されて評価されているらしい。私が、その第1回受賞者に選ばれた。査読は無償の奉仕であり、ほんのわずかでも学問の発展に寄与出来たことはいけい。また、本書に記述した「査読者はここを見る！」が客観的に正しかったと認定されたわけであり、その点もうれしかった。

CRST (Clinical Research Support Team in Jichi) について

<http://www.jichi.ac.jp/dscm/CRST.html>

2010年7月にCRSTを立ち上げた。「地域での研究成果を英文雑誌にアクセプトさせる」が大目標である。1年1ヶ月(執筆時点)が過ぎ、以下の成果がでた。

支援依頼 19 件

- ・ 英語論文アクセプト 3 件 (すでに出版)
- ・ 投稿中 2 件
- ・ 文作成支援中 7 件
- ・ 共同研究 1 件 (準備中)

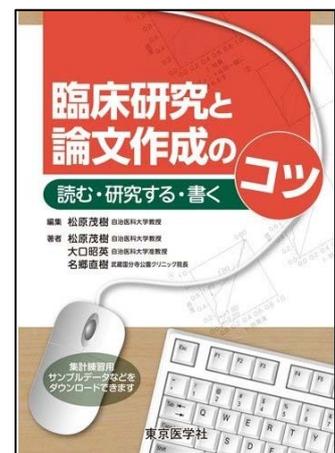
1年間で3編が出版された。CRSTの後押しがなければ、これら3編は日の目を見ずに、僻地勤務医の引き出しの隅に埋もれていたであろう。現在、医学は専門分化が進んできた。「論文を書く」もしかり。「自分の分野しか論文が書けない、見られない」学者も多くなってきたように思う。本当はそれではいけない。発見内容に何らかの価値を見つけ出し、そこを拾い上げて polish し、structure 正しい英文論文を記述する、ここまでは、大学人の持つべき共通技術だと思う。CRSTはこの1年間で、望外の成果を得た。ただ、CRST 構成員の一部に過大な負担を強いている面もある。CRST が5年10年20年と続き、年間5編、10年で50編の英文がでてくれば、本当に素晴らしい。日本にも、多分世界にも類例のない事業だろう。今後、ますますCRSTへの依頼論文が増加すると予想される。CRST 先生方の一層の奮起を期待すると同時に、CRST 構成員の一部だけに過負荷とならない方策も考えていきたいと思う。

僻地で研究する仲間を助けよう！

データを僻地に埋もれさせないで、英文に残して、世界へ発信しよう！

最後に：CRSTへ依頼する側の先生へのお願い

無理に全文を英文で書いてくる必要はありません。無理な英語だと却って意味が把握出来ない。日本語まじり問題なし。内容が正確に把握できれば、英文は当方で書く事ができます。それよりも、正しい日本語で、正しい structure の論文下書きを書いてきて下さい。発見内容に価値があるならば必ず(多分必ず)英文論文にできます。“正しい structure”の意味がよくわからない方は、成書を短時間でも読み、“正しい structure”を理解した上で、論文ゲラを書いてきて下さい。万一、適切な成書がそばにないならば、前半でご紹介した本も候補の1つとして御考慮下さい。「臨床研究と論文作成のコツ：読む、研究する、書く。東京医学社 3990円」です。尚、印税というのはびっくりする程安く、3990円が売れると、私には約200円弱がいただける仕組み、とのこと。けっして、おこずかい稼ぎの宣伝ではありませんので、念のため、。



[発行] 自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>